第５回秋田県泌尿器科集談会

秋田大学医学部泌尿器科開設25周年記念
公開フォーラム

21世紀に向けた対がん戦略

―われわれは何をし、何を目指すか―

がん治療の現況と将来構想

演者　国立がんセンター中央病院長
垣添　忠生　先生

21世紀のがん治療

演者　京都大学教授・日本癌治療学会長
吉田　修　先生

司会　秋田大学泌尿器科　加藤　哲郎

日時：平成９年５月３１日（土）午後３時～５時

場所：秋田キャッスルホテル　放光の間

会費無料（多数のご参加を歓迎いたします）

主催　秋田大学医学部泌尿器科学教室（事務局）
秋田県泌尿器科集談会、秋田大学医学部泌尿器科同窓会

後援　秋田県医師会、秋田市医師会、秋田市、秋田市教育委員会

講演１「がん治療の現状と将来構想」

国立がんセンター中央病院長

垣添忠生　先生

講演２「２１世紀のがん治療」

京都大学教授・日本癌治療学会長

吉田　修　先生

挨　拶

秋田大学医学部泌尿器科　教授　　加藤哲郎

私どもの秋田大学医学部泌尿器科が開設されて、満25年が経過しました。この間、学内外の関係者はもとより、多くの方々から有形無形のお力添えをいただき、今日に至ることができました。この機会に、ささやかながら謝意を表したいと考え、一般公開フォーラム「21世紀に向けた対がん戦略」を企画いたしました。

がんは、過去20年間わが国の死亡原因の第一位を占めつづけており、それだけ社会的関心も高く、医学における最重要の研究課題となっています。基礎研究にもとづいた治療法の開発が世界的規模で精力的に進められ、その結果、より正確な診断とより適切な治療法の選択がひろく行なわれ、先端科学である分子生物学の応用も試みられるようになりました。しかし、がん制圧への道のりが、予想以上に険しいのも確かです。それは、がんへのアプローチが「生命のありよう（本質）」に迫る大きな事業でもあるからです。

いま私たちは、新しい世紀を迎える胎動のまっただなかに居ります。そして多くの難問をかかえたがん治療についても、明日につながる道が模索されています。本フォーラムの講師を御快諾くださった吉田修先生と垣添忠生先生は、がんの研究と治療の分野でわが国を代表する指導的立場におられます。ともに泌尿器科学が御専門ですが、御経歴からも明らかなように、わが国における対がん戦略を展望していただくのに誠にふさわしいお二方です。

このフォーラムを、がん治療研究の現状を学びつつ、将来を考える場にしたいと思います。

垣添　忠生　（国立がんセンター中央病院長）

1967年東京大学医学部卒。1975年より国立がんセンター病院勤務、1990年副院長、1992年国立がんセンター中央病院長。日本泌尿器科学会評議員、日本癌学会・日本癌治療学会評議員兼理事。「膀胱癌の基礎的、臨床的研究」により国立がんセンター総長賞（1980年）、高松宮妃癌研究基金学術賞（1985年）を受賞。

【講演要旨】

がん治療は、診断と治療が両輪のごとく進歩して、今日の姿がある。がんの診断はどの臓器に、どんな性質のがんが発生して、どのくらい進んでいるかを見極めることにある。そして情報を総合して、患者さんに最も適した治療が選択される。がんの種類と病期、患者さんの希望や年齢、全身状態に応じて、手術、放射線療法、化学療法、あるいはそれらを組合わせた集学的治療が行われる。手術では、拡大手術と縮小手術、開放手術と内視鏡手術が使い分けられる。放射線治療にも、陽子線治療や重粒子線治療といった、新しい選択肢が導入されよう。化学療法の効果は、がんの性質と抗がん剤の有効性にかかっている。また年齢やがんの悪性度を考慮して、経過観察のみという選択肢もある。診断が精緻であればあるほど、治療の選択肢は広がり個別化が進む。そうなると、がん告知とインフォームド・コンセントの重要性はますます高まっていく。こうしたダイナミックに変貌しつつある現代のがん診療の潮流をお話ししたい。

吉田　修　（京都大学教授・平成9年度日本癌治療学会長）

1960年京都大学医学部卒。同泌尿器科入局。1968年米国ウィスコンシン大学病理学教室に留学。1979年京都大学医学部泌尿器科学講座教授。1993年から本年3月まで京都大学医学部附属病院長、日本泌尿器科学会理事長、本年度日本癌治療学会長。「膀胱癌の実験発癌の研究」により京都新聞文化賞（1980年）、高松宮妃癌研究基金学術賞（1985年）を受賞。

【講演要旨】

がんは遺伝子の変化によっておこる病気である。このことが明らかにされて以来、遺伝子は、がんの診断と治療に欠かすことのできない研究対象となっている。遺伝子研究は、がんの臨床的研究に大きな役割を演じており、なかでも遺伝子治療は大きな可能性を有するものである。一方、がんの治療現場においては、単なる治療成績の向上だけでなく、より侵襲の少ない治療と生活の質（QOL）をも重視した治療が行われるようになっている。がんは増加している。それは高齢化社会が進んでいる結果ともとらえられ、高齢者のがん治療という、重大でかつ困難な課題をもたらしている。また、限られた医療資源の中でがんの治療をどのように行うべきかも、考えなければならない点である。以上のような、２１世紀に向けての課題を、演者の専門である泌尿器がんを中心に解説する予定である。